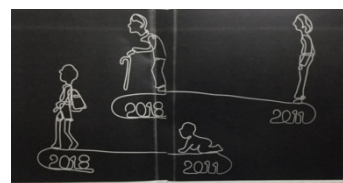


「アレ」が奪い去った7年半



標題は『Days JAPAN』12月号の「おしどりマコ・ケン
の実際どうなの!？」第77回。「原発事故」と言わず、「アレ」
と表現する人も。福島の人々の「声」を紹介したい。写真はケンさんの針金アート「7年
半という時間。赤ちゃんが小学生に。70代の方が80代に」。

「原発事故から7年7か月経ちました。帰還は困難だと言われていた地域で開催される復興イベント。オリンピック開催に湧き立つようなお祝いムード。放射線量が低くなり安定したからといって外されようとしているモニタリングポスト。陸上保管を選択肢から外し、海洋放出ありきで進められる汚染水処理方法。おかしいと思いながらも、自分が思ったところで何も変わらない。向き合うことにも疲れたし、考えるのはもう止めよう、と。自分の思いとは別な方向へとどんどん進む社会の姿に傷つき、複雑さを多くはらむゆえ、時間が経つほどに人々は口を噤んでしまう。私たちは今、そのような状況を目の当たりにしています。多岐に渡る問題の数々は、向き合い続けることにも困難さを伴います。ですが、それでも向き合い続けなければという奮い立つこの思いは、自分の存在なきあとの、その先に続く未来を思えばこそそのことでもあります。心が追いつかないほどに疲れてしまったときは、羽を休めることも大切ですが、それでも感じることを止めず、考えることを止めず、未来を描いていけるように、私たちは歩み続けたいと思っています」

「農業はね、楽しいけど辛い。でも毎日やってるからできるのね。事故から7年半経って、64歳だったのが72歳よ。さ、戻って農業再開してくださいと言われても、7年間も狭い仮設住宅・復興住宅にいたの、体が動かないの。毎日続けていたらできたらろうけど……。この奪われた7年は誰も何も補償してくれない」

「原発事故前に小高に約1万3000人が暮らしていましたが、避難解除で戻ってきたのは約2800人です。ほとんどは70代から80代です」「自宅周辺の放射線量はかなり低くなっていますが、少し山の方に行くと、高いままです。夫も私も好きだった山登りはできなくなってしまいました。自宅裏の土手で採れたウドやごみ、わらびは自分たちは食べていますが、おすそ分けはしなくなりました。ふるさとの山や土から採れたものを安心して口にすることができない、その喜びを親しい人たちと分かち合うことができないことが何よりも悲しいです」「ようやく小高に戻れても、孤独や不安に耐えて生活しなければならないのです。私たちが本当に元の自然や暮らしを取り戻し、安心して生活できるようになるまで、国や東電は責任を持ってほしいです」

(2018年12月11日)